

令和7年度 学校における居場所と絆づくり実践研究事業 実施報告書

1 学校名

栃木県立高根沢高等学校

2 実施学年等

第1学年

3 生徒に期待する姿

【育てる生徒像】

「職業的・社会的・精神的に自立できる生徒の育成」

知・基本的な知識・技術を身につけ、より高い目標に向かって努力できる生徒

・自ら学び、考え、判断し、社会の活性化に貢献できる生徒

徳・自他をかけがえのない存在と認め、大切にできる生徒

・マナー、モラル、ルール等を理解し、正しく判断し、行動できる生徒

体・自分の役割を果たしながら他者と協働して、粘り強くチャレンジできる生徒

・健康の維持・管理や体力の増進に努め、安全を意識した行動のとれる生徒

【2学年目標】

・基本的な生活習慣の確立

・豊かな人間性の育成

・基礎学力の定着、進路意識の高揚

【3年後 目指す生徒像】

・自分の気持ちや考えを表現し伝えることができる生徒

・自分の軸を持ち自立していける生徒

・自分も他人も大切にできる生徒

4 本事業の内容

- (1) 年度途中における欠席状況等の分析及び不登校の兆候が見られる生徒を対象とした初期対応の取組
- (2) アンケート調査による実態把握及びすべての生徒を対象とした不登校の未然防止に向けた取組の工夫
- (3) 年3回の学校訪問

【第1回学校訪問】	【第2回学校訪問】	【第3回学校訪問】
令和7年5月	令和7年10月	令和8年2月
○ 本事業の趣旨説明	○ アンケート調査結果の分析	○ アンケート調査結果の分析
○ 欠席状況の把握	○ 4～9月における10日以上、20日以上の欠席者数の確認	○ 4～1月における20日以上、30日以上の欠席者数の確認
○ アンケート調査結果の分析	○ 1学期の状況を踏まえた2学期の取組についての助言	○ 3学期の取組及び次年度の取組についての助言
○ 学校の取組状況の把握		
○ 今後の取組について検討		

※ 訪問時には、生徒の欠席状況から、支援状況の確認、関係機関との連携支援等について情報共有をしたが、本報告書においては、個人情報保護の観点から内容は割愛する。

5 具体的な取組等

(1) 第1学年の取組（不登校対策の視点から）

予 防	未 然 防 止	全 て の 生 徒 対 象	<p>○ 生徒に関する情報の共通理解、先生方の生徒理解に向けた取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 週1回の担任打合せと月1回の学年会 ・ 遅刻・早退カードによる教科担任とホームルーム担任間の情報共有 ・ 朝のホームルームにおける生徒一人一人への容儀指導と声かけ（スマートフォンを回収しながら） ・ 生徒面談（必要に応じて早急に実施実施） ・ 生徒を承認する声かけの励行 ・ Build-Up Note を通してのコミュニケーション（家庭学習の習慣作りと同時に、担任がコメントを記入し励ますことにより自己肯定感を高める） ・ 部活動顧問と担任との情報交換 ・ 担任と教科担任、生徒指導主事との緊密な連携 ・ 欠席した生徒保護者への電話連絡 ・ 養護教諭との連携 ・ 朝の打合せの活用（共通理解） ・ 生徒の思いを聞き出す定期的なアンケートの実施 ・ 保護者との情報交換 	<p>○ 生徒同士の相互理解や仲間づくり、生徒の主体的な活動を意図した取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 挨拶や言葉遣いなどのマナーの指導 ・ 学習環境の整備 ・ ソーシャルスキルトレーニングの実施 ・ 行事における、生徒間での話合いの機会の提供 ・ スポーツ大会における生徒の主体的な活動の支援 ・ グリーンカードの励行（善行した生徒を褒めると同時に記録し、自己有用感を高める） ・ 達成感のある授業の実施 ・ 進路体験行事における主体的な活動
	初 期 対 応	生 徒 対 象 気 に な る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒面談の実施 ・ 保護者との情報共有 ・ 関係する先生方との情報共有 	/
	支 援	生 徒 対 象 必 要 な	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担任と教科担任、生徒指導部長との緊密な連携 ・ 担任の先生から欠席した生徒保護者への電話連絡 ・ 養護教諭との連携 	/

(2) 意識調査の結果等

【調査の実施時期】 1回目：5月 2回目：9月 3回目：2月

【各問の回答割合の推移】 [%] ※「当てはまる群(ア+イ)」、「当てはまる群(ウ+エ)」は整数値で表示

問1 「学校が楽しい」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア+イ)	当てはまらない群(ウ+エ)
1回目	61.0	30.0	8.0	1.0	91	9
2回目	53.3	34.4	10.0	2.2	88	12
3回目	33.8	46.5	9.9	9.9	80	20

問2 「みんなで何かをするのは楽しい」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア+イ)	当てはまらない群(ウ+エ)
1回目	70.0	26.0	4.0	0.0	96	4
2回目	67.8	21.1	8.9	2.2	89	11
3回目	49.3	36.6	7.0	7.0	86	14

問3 「授業に進んで取り組んでいる」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア+イ)	当てはまらない群(ウ+エ)
1回目	50.0	41.0	7.0	2.0	91	9
2回目	45.6	44.4	8.9	1.1	90	10
3回目	43.7	49.3	7.0	0.0	93	7

問4 「授業がよく分かる」

回答	ア	イ	ウ	エ	当てはまる群(ア+イ)	当てはまらない群(ウ+エ)
1回目	34.0	48.0	11.0	7.0	82	18
2回目	35.6	46.7	12.2	5.6	82	18
3回目	32.4	52.1	9.9	5.6	84	16

ア 当てはまる

イ どちらかといえば当てはまる

ウ どちらかといえば当てはまらない

エ 当てはまらない

ア. 各問における調査結果推移の概要

- 問1 「学校が楽しい」
「当てはまる群」の減少が見られたが、80%を維持した。
- 問2 「みんなで何かをするのが楽しい」
「当てはまる群」の減少が見られたが、86%を維持した。
- 問3 「授業に進んで取り組んでいる」
「当てはまる群」は1回目から2回目にやや減少したが、3回目は増加が見られた。
- 問4 「授業がよく分かる」
「当てはまる群」は1回目、2回目は82%であったが、3回目は84%に増加した。

イ. 調査結果から

- 「学校が楽しい」、「みんなで何かをするのは楽しい」の「当てはまる群」が減少したことについては、人間関係の変化や前後の行事等が影響したと思われる。
- 3回目に問3「授業に進んで取り組んでいる」、問4「授業がよく分かる」の当てはまる群が増加していることから、1年間を通じて、先生方が学習に関する生徒の取組状況と達成状況の把握に努め、授業のなかで達成感のある授業を実施したことにより、生徒が各教科を学ぶ楽しさを実感し、学習意欲を高められたのではないかと考えられる。

6 成果

- 朝のホームルームにおいて、スマートフォンを預かる際に一人ひとりに声を掛けることによって、担任に見られている、気にかけてもらえているという意識が定着し、担任に限らず教員の言葉に素直に耳を傾けられるようになった。
- Build-up Note は原則毎日提出するように指導していた。担任がコメントを記入して返却することにより、それを楽しみに継続して取り組めるようになった生徒がいた。学習だけでなく、悩み事があるときはノートに記入して提出する生徒もおり、問題行動等の早期発見につながったこともあった。
- 体育祭やスポーツ大会を通して、各クラスの連帯感が強まり、生徒同士のコミュニケーションが活発になり、互いの発言を認められる環境づくりにつながった。

GREEN CARD	
日付	9月10日 / 年 4組 14番
氏名	
上記生徒は、下記の善行を行いました。	
日付	令和7年9月9日
善行の内容 体育・授業参りに 空手とバドミントンと自分から 拾った。	
署名	発行者 佐々木 伸 運部印



7 今後の取組

- 2年生として学校の中心的存在となり、学校行事に主体的かつ意欲的に取り組めるよう支援し、生徒間の交流を深めていく。
- 学年共通の目標を掲げ、各学級の進捗や実践を定期的に共有することで、生徒同士が互いを認め合い、高め合う集団づくりを推進する。(漢字計算テストの目標点、体育祭での勝敗等)
- 生徒との多面的なコミュニケーションを通じて小さな変容を捉え、生徒自らが課題を克服し、伸ばしようとする「自己成長力」を育む支援を推進する。

〔県教育委員会担当者のコメント〕

高根沢高等学校第1学年では、学年主任を中心として、生徒一人一人を大切にしている視点に立った継続的かつ組織的な取組が行われ、不登校の未然防止及び居場所と絆づくりにおいて成果が見られた。

朝のホームルームにおける日常的な声かけや、Build-Up Note を活用した双方向のコミュニケーションは、生徒が「見守られている」「認められている」と実感する機会となり、教員と生徒との信頼関係の構築に寄与している。また、担任打合せや学年会、遅刻・早退カード等を通じた教職員間の情報共有、養護教諭や部活動顧問との連携により、生徒理解を深め、生徒の小さな変化を見逃さない体制が整えられている。

加えて、体育祭やスポーツ大会などの行事を通して生徒同士の交流が深まり、互いを認め合う雰囲気が育まれている。さらに、全校を挙げて実施しているグリーンカードの取組では、生徒の良い行動や努力を認め、記録し、言葉で伝えることにより、生徒の自己有用感や自己肯定感を高める成果が見られ、学校訪問の際にも生徒が自主的に先生の仕事を手伝う姿が見受けられた。

意識調査の結果からは、「学校が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」と感じる生徒の割合に一部減少が見られたものの、全体としては高い水準を維持している。一方で、「授業に進んで取り組んでいる」「授業がよく分かる」と感じる生徒(当てはまる群 [ア+イ])の割合が3回目に増加している点は、教員が生徒の実態を丁寧に把握し、達成感を重視した授業改善に取り組んだ成果と考えられる。学習面における成功体験の積み重ねが、学校生活全体への前向きな姿勢を支えるとともに、その影響が周囲の生徒へも波及していくことが期待される。

来年度も、2年生として学校の中核を担う立場となる生徒が、教育活動に主体的に参画できるよう、生徒一人一人を大切にしている視点に立った指導・支援や生徒同士が支え合い、認め合える環境づくりが一層推進され、生徒の「自己成長力」が着実に育まれていくことを期待している。